

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】高 峽

【所属】(助成決定時)名古屋大学大学院文学研究科

【研究題目】近代化のなかの人力車—日中比較言説研究の試み—

【研究の目的】

助成者は「近代化のなかの人力車—日中比較言説研究の試み」というテーマの下で、人力車を日本および中国の近代化過程の一つの象徴的な存在として捉え、文学や新聞雑誌記事などにおいて人力車がいかに問題化され、記述されてきたかの分析を通して、日中比較文化史を構築しようとしてきた。明治3年に日本で発明された人力車は、日本という枠を超え、中国・韓国などの東アジアの国々に広がり、その結果として「人力車文化圏」と呼ぶに足る地政学的現象を生み出した。しかし、なぜこの地域圏で、こうした乗り物が発明され、そこで広まったのか。他の地域圏(例えば、西欧圏)では、そういうことはなかったのか。換言すれば、助成者の研究は、人力車の歴史というよりも人力車を通して見た日中近代化の歴史である。

【研究の内容・方法】

【研究内容】

助成期間中、主に日本の近代化過程における人力車(夫)という問題を追求してきた。日本の近代および近代化の進展と人力車の出現は、時期の上で関係している。「文明開化での唯一つの創造物」(林屋辰三郎編『文明開化の研究』岩波書店、1979)とも呼ばれる人力車は明治3年に発明され、従来の二人の労力を要する駕籠に代わって、庶民が利用出来るはじめての「車」として歓迎され、明治時代を通して重要な交通手段だった。明治期の東京では、人力車夫が都市「貧民」の代表的な職種の一つであった。この職種には、都市東京における貧困・労働・階級を中核とする問題が集約的に表れる構造を有していたので、日本の近代化の過程における人力車経験の意味を主に文学テキストを駆使して考察してきた。また、人力車夫は日本の早期ルポルタージュ(文学)においては貧困・階級などの社会問題を表象するものとして、頻りに現れている。たがって、文学における人力車夫の表象を考察することは、日本近代文学の創出期における〈下層階級と文学〉や〈貧困と文学〉の関係を検討する手がかりとなると考え、研究を進めてきた。

【研究方法】

- ①文献・資料調査。当時の人力車(夫)をめぐる言論状況を調査する。そのため、多くの読者を得ていた総合雑誌・新聞に着目し、人力車(夫)に関連する記事や文学作品を集め、分類する。また、作家全集や文集を広く渉猟し人力車(夫)が登場した文学作品を収集する。
- ②テキスト分析。個々の文学テキストに描出された人力車(夫)イメージを取り出して分析するのみならず、当の文学テキストを包摂する文化的・政治的状况を含めた精緻な分析を行う。これはテキスト分析と政治的批評との関係を論究する上で不可欠な作業である。文学における人力車(夫)の表象＝再現を、文化的コンテキストにおいて考察するだけでなく、何故、人力車(夫)はそのように表象されねばならなかったのかを問い直す。

【結論・考察】

明治 10 年代から始まった農村の分解と日本における産業革命との時差が作り出す都市貧民の問題は、明治期を通して最も深刻な社会問題のひとつであった。人力車夫はスラム住民の最もポピュラーな職業の一つである。明治 20、30 年代において人力車夫は、「鹿鳴館に象徴された」文明化された世界の対立項として政治性が付与されるようになった。やがて産業の発達によって人力車夫が工場に吸収されてしまい、人力車も日本から消えた。だが、たとえば『無法松の一生』にあるように、なぜか人力車夫という職業は認識論のカテゴリーとして近代化の進展のなかで消えてゆく時代の徴表として審美的な意味を付与されるようになった。つまり、ここで人力車夫という日本近代の下層部分の表象を通して社会秩序を構成する上での矛盾した性格を暴きだして、それによって日本の近代そのものを問い直した。

